

つまらない仕事

(20170527-20170626,20181031-20190128)

H2nl3sc

私の仕事はつまらない文章を書くことであり、この仕事に就いてから今まで一度も失敗したことはない。同期の者たちのほとんどは早々とおもしろい文章を書く仕事に進み、私ともう一人だけがつまらない文章を書く仕事を選択した。しばらくするとおもしろい文章がもてはやされるようにはなったが、やがて時代は変わってしまったのだ。今ではつまらない文章でなければ文章ではないという風潮すらある。これが私の仕事である。

おもしろい文章というものは人目につきやすいので、そのような文章を書く者が大勢いるかのように思われがちだが、実はそんなにはいない。そもそも同期の中で今でもおもしろい文章を書いているのは今ではたった一人にすぎない。毎年数は減ってゆくばかりであり、故にいずれ彼もまたいなくなるのだろう。それは決しておもしろい文章というものが地上から消えてしまうということの意味するわけではなく、ただおもしろい文章というものが新たに生まれることがなくなるというだけのことだ。おそらく、これまでに書かれた無数のおもしろい文章はなんらかの形で残されるだろうから、人々はそれを繰り返し楽しむことになるだろう。おもしろい文章というものは、読み返すたびにその面白さを失っていくものであるとも言われるのだから、愛好家にとってそんな文章がいつまでもおもしろいのかどうかはまた異なる問題である。私はつまらない文章を書く仕事を一筋に続けているので、おもしろい文章を読むことなどこれまでもこれからも一度もないだろうから、彼らの行く末については何も想像できない。ただ、これまで書かれ継がれてきた文章のひとつの集団がこの世から姿を消してしまうのかと思うと幾分か心は痛む。勿論、これは社交辞令にすぎない。

この頃は、何故この仕事を選んだのかと聞かれることも多くなった。そんなときは、将来性があったからだと答えることにしている。さらに将来性とは何のことかと問われた場合には、おもしろくない文章を書くこの仕事をこうして長い間続けられたということは、私にも多少なりとも才能があったということなのでしょうと返す。それが答えになっているのかいないのかは分からない。今も昔も、大抵の者はまったく文章を書かないか、あるいはおもしろい文章しか書けないかのどちらかなのだから、つまらない文章を書けるというだけのことであってもそれは何かしらの才能であると考えてもよいだろう。この道を選ぼうと考えたとき、それを才能だと考えていたかどうかまでは覚えていないが、そう答えておけば若い頃の私が下した判断をおもしろい決断などと誰も思いはしないはずだ。つまらない文章を書く者の人生につまらなくないできごとなどはありえないからである。

私の仕事がつまらない文章を書くことだったので、最近まで私には仕事場もなければ机もなかった。初めて仕事についた日に上司から、どうせつまらない文章を書くだけであれば国道の北側の歩道で腹ばいになって書けばよいだろうと言われ、その指示に驚いていると屋根のあるところがよければ食堂の床の上で書いても十分につまらないだろうとも言われたものだ。その場合も食堂の冷たい床の上で腹ばいになり床のワックスを舐めながら書くのだという。内臓を適度に冷やす

ことが肝要だと上司は天井に視線をさまよわせながら教えてくれた。国道で腹這いになって書いていると不審尋問を受けたり理由もなく石を投げられたりするものだ。私と共に、もう一人つまらない文章を書く仕事を選んだ者がいたと前に書いたが、彼は勤務開始十日目にして、誰かの投げた石の当たりどころが悪くて死んでしまった。十分につまらない文章を書いてはいたが、その人生は誰かがおもしろいと思わなくもないような終わり方をしたということだろうか。だとすれば、これは記憶違いだろう。つまらない文章を書く者の人生がつまらなくないなどということはないからである。

上司のことばに従って食堂の床の上で書いた文章というものがどう工夫して書いてみてもなにかしらつまらなくなるものだということが一週間もしないうちにわかった。だから、私とその同僚は国道に出かけて行くことにしたのである。この仕事を始めたばかりで右も左もわからなかったあの頃は、内臓を冷やすことがつまらない文章の肝要だなどという話こそが話を面白くするための作り話だとは少しも考えてみなかった。ただ、国道の北側の歩道に向かう途中には公園と大きな湖があり、最初にそれを見た時は美しいと感激したのだが、その場所を通るたび目にする光景がいつも何一つ変わらないということは、その日の帰り道で分かった。そして一週間もたたないうちに、その光景がどれだけ退屈なものであるかということに気づいたとき、変化のないということこそがつまらないということなのだ初めて理解したのであり、それこそが我々の上司が新しい部下に最初に教えようとしたことだったのかもしれないと気づいたものだ。

今から思えば、彼女は若いだけでなく十分に魅力的な女性だった。彼女というのは、私とともにただ一人つまらない文章を書く道を選んだ同僚のことである。仕事について半年ほどの間は、つまらない文章を書くことの困難さに心を奪われていたので、彼女の魅力には少しも気づかなかった。半年あまり経ち、私とその同僚とで仕上げた文章が、上司から初めて十分につまらないと認められた日、よるこびの笑顔を浮かべる彼女がひどく美しく見えたものだ。「ひどく美しい」というのはただ「美しい」のだろうかそれとも「ひどい」というのだから「醜い」ということなのだろうか、彼女を見ながら私は考えていた。実は、今となってはその日の彼女の顔がどのような表情を留めていたのかを思い出すこともできない。「美しい」といってもそれだけのものだったのだということだ。「つまらない」を超えるような概念などどこにもありはしない。

おもしろい文章が世の中にもてはやされていた頃、私には初めての子供が生まれた。彼女との間の子供である。生まれた時代のせいなのだろうか、その子供はおもしろい文章ばかりを読み漁り、年頃になると私たちの目の前で、おもしろいと評判の本の表紙を我々に見せつけるようにして読むようになった。それはつまらない文章を書くという仕事に属している両親に対する当て付けだったのかもしれないし、つまりは軽蔑やそれが自分の両親であることへの怒りだったのかもしれないと思う。子供が成長する過程では、そういう時期もあるものだ。一度、机の上に置き忘れられていた息子の日記をふと手に取って開いたことがある。読み始めると惹きこまれ夢中になって読み耽っていたのだが、その姿を部屋に戻ってきた彼に見咎められてしまった。それ以来、彼は私に二度と口をきいていない。

しかしだとすれば、彼は私よりも年上だったということにならないだろうか。あの日記に最初に書かれていた日付は私の生まれた日よりもずっと古いものだった。そうであれば、彼は見かけよりもずいぶん年上だったはずだ。なんと長い間勘違いしていたのだろうか。あれは私の息子などではなく父親だったということなのだろう。確かに、つまらない文章を書く仕事に進もうかど

うしようかと悩んでいた頃、あの父親は幾度もおもしろい文章を書く道を勧めてくれた。あれ以来彼が私に口をきかなかったのは、たぶん、彼の日記を盗み読んだからというよりは、父親の意向に逆らってつまらない文章を書く道を選んだ息子への失望の故だったのだろう。父が一年前に亡くなったと母親から聞かされたのはほんの先週のことだ。

一緒につまらない文章の仕事に進んだ同僚が自分の母親だと知ったのはほんの先週のことだ。結婚してから何年もたっていたが、父の死を告げる彼女から初めて、あなたの妻は他ならないあなたの母親だと知らされたのである。秘密を明かそうかどうか何年もためらいつつ、父親の死こそがよい機会だと考えたのだと話し始めたとき、私には彼女が何を言おうとしているのかすぐにわかった。とはいえ、つまらない文章を書くという仕事をしている以上、誰かがおもしろいと思うに違いないそのような人生は、私の人生ではありえない。つまらない文章を書く者の人生がつまらなくないなどということはあるからである。つまらない文章を書く仕事を選んだのは同期の中では私ただ一人であった。同じ道を選んだ同僚などはいはしなかったし、その同僚は存在していないのだから死んだこともない。これまで一度も結婚などしたことはなく、勿論、子供はいなかった。父親も母親さえもいなかったと言いたいところだが、それはそれで私の人生がおもしろいものになってしまう。残念なことに両親はいたのだろう。

私の仕事はつまらない文章を書くことなので、命じられれば何も書かないこともあった。何も文章が書かれていないとき、それは大抵読むことができないのだが、読めない文章はおおむねおもしろいとは言えないから、何も書かないことさえも私の仕事なのだと諭された。最初の頃はそれで納得していたのだが、よく考えてみればそのように読めない文章は、おもしろいと言えないのと同じくらいつまらないとも言えないのである。このことに気づいてからは、その手の仕事を引き受けることはやめてしまった。一文字も書いていない読めない文章の対価を受け取るたびに、自分の才能が、目に見えないほどではあるかもしれないが削り取られていくような気持ちになったからだ。あるいは本当にそのたびに才能が失われてゆき、今では何一つつまらない文章を書けなくなっているということもあるかもしれない。とはいえ、つまらない文章を書けなくなっているかどうか、私には分からない。

確かに、長い年月、つまらない文章を書き続けてはきたが、それが本当につまらなかったのかどうか上司以外の誰かに評価を受けたことはない。仕事を始めてから半年かけて書き上げた文章に、これは確かにつまらない文章だと太鼓判を押してくれた上司は、それから大抵、提出した文章にはどれもあまりおもしろくないからまったくおもしろくないまでのばらつきはあったけれども高い評価をつけてくれたし、少しでもおもしろいところがあるなどと指摘されたことさえ一度もなかった。今までこの仕事で一度も失敗したことがないというのは、そういうことだ。上司の評価のことを言っているのにすぎない。あの上司は、最初から何か含むところがあってそのように評価したのであり、本当はこれまで一度もつまらない文章など書けてはいなかったのだと言われれば反論することは難しい。例えば、初めの頃であれば、上司が私の若い肉体を狙っていたから、そのような評価によって私の好意を得ようとしていたということもありえたのかもしれないが、仕事についてから今まで一度も口説かれたことなどないのだから、そういう理由ではないだろう。あるいは私を勘当した父親が実は何かの重要人物であり、その人物に何らかの目的を持って近づくために私の好意を得ようとして上司が歪んだ評価を続けてきたということもあるかもしれない。あるいは上司は文章を読む教育を受けておらず、私の文章を読んでも何一つ理解できなかったので、無難な評価を続けていただけだということも考えられるだろう。あるいは上司がつまら

ないと評価していた文章がどれひとつとして私の書いたものではなかったということもありえなくはない。それとも、私と共につまらない文章を書く部署を選択したもう一人の同期の誰かがすべてを書いていたという真相を明かされればそうと信じるしかないではないか。いずれにせよ、どのような理由から生まれたにせよ、そのような評価にどんな価値もありはしない。

確かに、おもしろい文章とつまらない文章との境界を明らかにするのは容易なことではない。しばしばおもしろい文章はいったいどこがおもしろいのか分からないほどおもしろいと評価されているのを聞くことがあるが、それは結局はつまらない文章であるということではないのかと思う。あるいは、忘れていたつまらない文章をふと思い出したとき、意外にも笑いを誘うほどおもしろいものだったということもある。あるいは、まだ書かれていない文章はおもしろく、すでに書かれた文章はたいていつまらないという言い方もあるではないか。あえて客観的な判断の基準を置くとするならば、それは苦情の数だろうか。おもしろい文章には苦情がつきものであり、つまらない文章にはほとんど苦情はない。それはおもしろい文章が他人目につきやすいため、たまたま不機嫌だった誰かが読んでしまうという機会が増えることであるとか、つまらない文章は読んでいるうちに退屈で眠ってしまい、苦情のハガキも夢の中でしか書けないということなどが要因としてあげられる。とはいえ私の仕事用の郵便受けには毎日入りきらないほどの苦情が届いている。それは決してわたしの文章がおもしろいからというわけではなく、その多くは、あまりにもつまらなくて最後まで読めなかったことへの非難である。かくのごとく読んでもいない文章に苦情を送ってくる者たちこそ如何ともしがたい。つまらない文章の読者はやはりつまらない者でしかないということであろう。

さて、上司の判断があてにならないとすれば、自分で評価するしかあるまい。しかし、自分の書いたものが十分につまらない文章であるかどうかは、それを書いた本人には判断しがたいものだ。というのも、そもそも自分の書いた文章は自分では読むことなどできないからである。文章に携わることのないほとんどの人々は、なんと呼ぶのかは忘れたが、文章を書く者は、文章を書いてはその文章を読み返し、読み返しては書き直すという作業を繰り返していると信じ込んでいる。それは根本的に間違っている。なぜなら、それはただ読んでいると思いついて入っているのにすぎないからである。そもそも自分の書いた文章は書いたとたんに何か別のものになってしまう。書いた当人の知らない言葉に置き換わっていることもあれば、文字ですらない何か見たこともない絵のようなものにも変わることもある。知らない言葉や文字ですらない絵のようなものをいったいどうやって読むというのだろうか。故に、自分の書いた文章を読むことなどできはしないのである。世間では、自分の書いた文章を読むほどつまらないことはないと言われることもあるけれど、本当のところそれはつまらないことでもなければつまらなくないことでもない。ただ読めないということに気づいていないだけなのである。そう、思い出した。それは推敲と呼ばれていた。もう誰も使わない言葉である。

あるいは、私と同じくつまらない文章を書く道を選んだ同僚のあれであれば、志を同じくした者であるならば、私の文章を正しく評価できていたかもしれないと思われるかもしれない。だがそれは不可能なのである。というのも、その同期である彼だったか彼女だったかは私とまったく同じ文章を書き、私もまたその同期である彼だったか彼女だったかと同じ文章を書くからである。すべての文字と句読点の位置すら同一であるが故に、経緯を知らない誰かがもしも二人の内どちらかの書いた文章を見せられれば、それだけでは書いた者がどちらなのかを判別することはできないだろう。仕事を始めて半年後、上司がつまらないと断定したあの文章は、二人で一緒に書いた

た文章というわけではなく、二人がそれぞれ別々に書いた文章がたまたままったく同じだったため、一緒に書いたのだろうと上司が誤解しただけのことだ。上司はふたりが別個に同一の文章を書いたなどとは想像さえしなかつただろう。私たち自身でさえ、どちらかがどちらかの文章を書き写したのではないかと思うほどだった。もしそうだとすると、どちらがどちらの文章を書き写すというのだろうか。同じ文章を書く二人がお互いの何かを書き写す理由などありはしない。それはつまり、誰であれ国道の北側の歩道で腹ばいになって文章を書けば、まったく同じ文章を書くことになるということなのかもしれない。だとすればそれが同じ文章であるかのように読めたとしても、結局それは別の文章であると言うべきだろう。あるいは、つまらない文章というものはつきつめればすべて同じひとつの文章になるということだろうか。それは、もう一人、三人目のつまらない文章を書く仕事に就いたものがいけば、比較し結論を出すこともできようが、つまらない文章を書く者が二人しかいないのでは、確かめるすべがない。いずれにせよ、そんな同期の彼だったか彼女だったかに、私の文章を評価することなどできるわけがあるまい。まったく同じ文章とまったく同じ句読点しか書かない者には、私の文章を読むことさえできはしないのである。

そういえば、おもしろい文章とつまらない文章とを区別するようになったのはごく最近のことである。昨日ということはないが、一年以上前ではないはずだ。それまではただ文章というものがあるだけだった。ただ、文章を書く仕事があるだけだった。古い文献を調べれば、そこにはある文章がおもしろいとかつまらないとかいった評価は一言もみつけられないだろう。このことから、当時はおもしろい文章もつまらない文章も区別されていなかったことがわかるのである。それでは、何十年も前に、おもしろい文章を書く仕事とつまらない文章を書く仕事とのどちらかを選ばされたのは何故だったのだろうか。我々の上司には、いずれつまらない文章の時代が来るという未来を見通す先見の明があったということだろうか。だが、それならば、おもしろい文章を書く仕事を選んだ彼らに正しい道を示さなかったのはなぜだろう。先見の明があったのであれば、部下全員を適切に指導することもできたはずではないか。つまりは、先見の明などありはしなかったのだ。何十年も前に、そもそも「つまらない」という言葉さえなかったかもしれない時代に、つまらない文章の価値を見出していた者がいたわけではないのである。

それにしても、それからしばらくしておもしろい文章がもてはやされていたあの頃、いったい何がおもしろいと言われていたのだろうか。あのようにおもしろいと呼ばれていた文章も、今つまらない文章と呼ばれている文章となにも変わらないつまらない文章だったのではないかと思うこともある。そうではなく、あのころ書かれていた文章は今でいう文章ですらなかったという可能性もなくはない。おもしろい文章だと言っていたけれども、本当に読まれて、それでおもしろいと思われていたのかどうかは分からないからだ。読まれもしない文章に苦情がくるのだから、読みもしない文章をおもしろいと言って持て囃す者も大勢いただろう。そして、もしもそうであるならば、今、目の前にあれらの文章が置かれたとしても誰もそこに文章が書かれていることにさえ気づきはしない。そういうことではないだろうか。あの頃、おもしろいと言われていた文章も結局思い出せないのであれば、そこに違いなどないのではないだろうか。たとえば、私であったか私の同僚であったかが協力してだったか個別にだったかに書いた、初めて上司につまらないと認められたといわれるその文章を私は思い出せない。おそらく私の同僚であったといわれるその何者かも思い出せないのに違いない。つまらない文章でさえもやがて忘れ去られるのである。つまらないと呼ばれるからにはそうでなくてはならないだろう。あるいは、そんなものははじめか

らなかったということだろうか。あるいは、そんな上司などいなかったということなのかもしれない。あるいは、そんな同僚などいなかったということなのかもしれない。

たとえ上司がいなかったとしても、同じ志を持った同僚の誰かがいなかったとしても、おもしろい文章の区別さえなかったとしても、はじめてつまらないと評価されたその文章は誰かが書いていたのに違いない。それを書いた誰かが誰であれ、その誰かがつまらない文章を書く仕事についていようとしていまいと誰かが書いたのには違いない。そうであればたとえばそれが他でもない今ここに書いてきたこの文章だと言われれば、誰であれそうなのかなと思うだろう。この文章を私ではない誰かが書いていたとしても、そう思わない理由というものを私は思いつかない。言いかえるならば、そうではない理由などないからだ。たぶんそうなのだろうと思う。なぜなら、これが他でもない私の書いている文章であるからにはつまらない文章なのであり、そうであればこれを読んできた者はおそらくこの文章を読むずっと以前に眠ってしまっているだろうし、それはすなわち、だれもこの文を読むことなどないということの意味するからだ。だとすれば、これがあの文章ではないなどと誰も言うことはできまい。そもそも、読んでいない誰かにとって、あの文章ということの意味さえわからないだろう。だとすれば、これがあの文章であるのと同じ程度には、これはあの文章ではないのである。それというのも、はじめてつまらないと評価されたあの文章は、これまでの経緯で明らかであるように、一切書かれてなどいないからだ。だとすれば、今まさに書かれてきたこの文章もまた、何も書かれてはいないと考えるしかあるまい。つまりは私の人生もまた書かれてなどいない。つまらない文章を書く者の人生がつまらなくないなどということはありませんからである。